

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	特養でもその人らしく最期を迎えられる
演者名	横須誠吾 中村佳代 中村瑠璃
所属	社会福祉法人山陵会 特別養護老人ホームフラワーホーム

目的

我が国は高齢者多死社会を迎え、『死に場所難民』という言葉まで出てきている。人として人生の幕をどこで閉じるかは非常に大きな問題であるが、住み慣れた自宅での死がなかなか叶わないのが現状である。当特養では、暮らし慣れた場所での看取りを目指し、医療・看護・介護が連携することで、特養であってもその人らしい満足感のある最期を迎えて欲しいと思っている。

実践内容

当特養における平成 12 年から平成 25 年までの入所者の死亡者数は 208 名であった。特養入所者の死亡者のうち 168 名は施設での看取りであり、うち 85 名(平成 16 年度以降)が家族に看取られての旅立ちであった。また、自宅での看取りも 9 名あり、医療機関に入院しての死亡は 31 名であった。

実践効果

多くの家族は積極的な医療を望むことは少なく、施設での看取りを希望した。自宅で看取りたい気持ちはあるが仕事や不安、心配などから消極的になりがちだが少数はあった。医療・看護・介護が連携し特養での看取り介護を提供することで、本人もリロケーションダメージを受けることなく穏やかに、また家族も長い付き合いの中で築いた信頼関係があることで安心して看取ることができている。

考察

特養での暮らしと看取りは住み慣れた自宅とは離れたものであるが、最後の暮らしの場であり自宅に一番近い。生活上の様々な介護や看護は施設スタッフが担うが、看取りは家族が行うことが人間として幸せではないかと考える。自宅に近い雰囲気、なおかつ専門職が 24 時間近くにいる特養での看取りは本人・家族にとっても安心して最期を迎えられるのではないかと考える。そこに留まらず、「昼の上で最期を迎えたい」という日本人の願いを叶えるために特養としてもっとできることがあるのではないかと考える。